



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
1月号

毎月23日発行
通巻449号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成20年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



チンシ バイ 珍珠梅 宮崎県串間市 菊地洋一さん撮影

昭和38(1963)年1月23日 月次祭法話より

宗教の本質を考える

法主 矢追 日聖(満51歳)

信仰の中心

今年は昨年暮れから新春にかけまして、天候が非常に荒れておりますし、悪質な風邪も流行しております。人間の心の状態も天と合い通ずるところがありますので、何かにつけて注意しなければなりません。

常に皆さん方に申しておるんですが、信仰の中心ということをよく認識しないとなりません。どの宗教や神様に信仰されていてもいいんですが、盲目で信仰することが一番危険を伴うんです。つまりよく目を開けて信仰していくという行き方でなければならぬと思います。

今まで大倭の信人の方には、常識として霊界の話や心霊の問題を法話の中に取り入れて話をしてきてはあるんですが、昨年あたりからこの様な問題についてお互いに修養しようという方が数人お見えになっております。これは突きつめてまいりますと非常に難しい問題なんです。人間には生まれながらにして誰もが知識以外の一つの心と言いますか、自分の靈魂というものがあつて、そこから出てくる霊能力というものを持つておるんです。これは信仰を持つておる人であらうとなかろうと、人によつていろいろと差はありますが、人間だけではなく動物なら皆持つておるものなんです。そこで、最近言われておる心霊科学という立場において、自分の霊能力を発揮しようとする方々もあるのは非常に結構なことなん

です。

霊能力発揮の目的とは何か

けれども、霊能を発揮するということを宗教の本質から見た場合に、最終目的は一体何であるか。煎じつめて考えてまいりますと、結論から言って、それは自分という人間を向上させて行く知識以外の力をつけることのような感じを受けるんです。自分の知識でもって、これでいいとか悪いとか判断しにくいような場合もたくさんあるんですね。自己を修養するという一つの宗教的な修行の方法論であると思います。

今更、霊能を出そうとか出さないの問題ではないんですね。修行することで、今まで隠れておった自分の霊的な能力というものを引き出すことは可能であり、その人の持ち前だけの霊能が出てくるのが本当なんです。

仮に精神統一をやるとすると、霊動が起こってくる。これは神経運動でもあるんです。肉体の力でなしに自分の神経の内側から起こってくる運動が、肉体の全神経に刺激を与えますから、体が動いてくるし手も震えてくる。ひどい人になりますと、行儀よく座って居る人でも、二尺とか三尺飛び上がる人もあれば、天井まで飛び上がるような極端なものもある。あるいは、その場でひっくり返って、三間でも五間でも座敷の上をコロコロと転げ回って向こうに突き当たり、また転んで戻ってくるような人もあるんです。

これは私が東京に居て、剣道の道場で指導しておった時に起こってきた現象で、昔から宮中や古い神道の家から出てくる書物の中に、雄健おたけび 雄詰おたけづめの行というのがあるんですね。

私はそれを知らなかつたんですが、たまたま宮

中で神さんの方を扱っておられた人がきて驚かれました。その人は書籍や記録で、禊祓けがらひの行の中に雄健 雄詰の行と記されておるものを読んでいたので、初めて意味が解つたと言つて喜んでくれました。

精神統一とか入神状態になつた場合に、極端な神経運動が出てくる。それを止めようとなんぼ力んでも、自分の内から出てくる力ですからどうすることもできない状態になるんです。といつて自分以外の霊魂が他から出てきて運動を起こさせておるんかというところ、決してそうではなく、全部自分の霊なんです。

そういうものをずつと指導しておりますと、初めはすごく荒いところから出てまいります。数を重ねてくると霊動の出方がだんだんと静かになつてくる。いわゆる鎮魂ちんこんしてくるんですね。大本教の鎮魂帰神ちんこんきしんというのはそんなことを言うんです。

そうなると、電気でしたら、電子というものがあつて電波が出てくると同じことで、霊子があつて霊波となるのを知りませんけれども、自然に自分の霊から出て行く放射的な霊波長が非常に敏感になつてくるんですね。すると中には、自然の動きをキャッチする者や、自分の明日の出来事を予言したり、その人の霊能に依じて、人の知らない世界まで知れるような場合もあるんです。

日本の古神道では、私が今言うような順序で霊動から入つて、つまり動から入つて静にいく、鎮魂帰神ちんこんきしんしていくことを禊祓けがらひと言います。順序をおうて禊をして、まず自分の人間向上をはかつていくと、それに並行して霊の能力というものがぼつぼつと顕著に出て来る。そういうような行き方が心霊科学で言う本當の霊能者だと思つておられます。

盆栽のような霊能者

ところが、我々から見るとほんの序の口で、まだ満足を霊能が出るか出ないか分からんような段階であつても、霊動が起こつて入神状態になり、いろいろな動作が始まつて来る人もある。例えば自分が言おうと思つてないのに言葉に出てくる状態の時には、非常に靈的に敏感になつておりますから、案外予言が当たる場合が多いんです。

自分以外の何かの働きによつて、予言したものの三つに一つが的中したりすると、人間は神秘的なものに好奇心を持つものですから、この人は霊能を発揮してきたとか、何かの背後霊が働きかけておるんだから、もう予言も霊界通信もできるだろうというように、周囲の者がこの人を霊能者のように扱つておだてあげるし、本人も優越感にひたつてのぼせ上がつてしまふんですね。このような実例を私はたくさん見てきておるんです。こうなつた場合には、本當に真つ直ぐに出る霊能者でも、真つ直ぐに出なくなつてくるんですね。

人間というのは、誰でも誇りというものがあつて、優越感を感じたいという浅ましい気持ちがあるんです。自分の心そのものが余程しつかりしてないと、あるいは、しつかりした指導者、審神さしん者がいないと、邪霊になぶられる場合も起こり得るんです。

要するにそうなると、自然の伸び伸びした霊能でなくして、寄つてたかつてハサミを入れた盆栽のような霊能者に落ちる場合が多いんです。

そうした者は永遠の力がないですから、三年、五年と年が経つにたがって、霊能そのものがあやふやになつて来る。また慣れてまいりますと、人間心によつて欲がそこに付いてくる。そういう

ことで立派な霊能を持つておる人たちが、下手に固まってしまつて小さい天狗さんとなり、それでおしまい。とどのつまりは、精神異常になり果ててしまう人もある。

また拝み屋さんをやつて、ぎょうさんの信者さんを集める。初めのうちはよく当たらるといふので皆寄つて来る。それが三年も経つてくると、ぼつぼつ人を騙しにかける。結局人を騙すということ、加美さんに対して逆らつておるんです。人間的に自分自身が大悪を積んで行くんですから、天網によつて自滅してしまふ結果となることも起り得るんですね。

宗教上からして、精神統一とか霊能の發揮というようなことは、非常に結構だと思ひますが、心靈研究なんかの場合には、下手をすると易者の出来損ないや生半可な予言者のような人間をたくさん養成して行く結果になつて、自分の人生を台無しにする場合もよくあるので、皆さん方も特にそんな点に注意してほしいと思ひます。

靈魂と自分の關係

本当の宇宙の真理というものを把握する。いわゆる神ながらの道の味をつかむには、靈動や精神統一のような方面から入つていって、自分の知識と知識以外の力、いわゆる自己靈の力によつて、自分の魂を練磨して人間向上の道をはかつていき、本当の悟りを持つということ、理想なんです。

今までお話ししましたように、いろんな道から入神状態に入り、人間の悟りの道というものを、自分の靈魂が、肉体を持つてゐる現在の自分に教えるんです。言葉で、あるいは日々の生活の中で、様々な方法によつて教えられるはずなんです。自

分は自分ながらに悟りを掴むんです。これは別に神さんから教わるんではなくて、自分の魂が現在の自分に教えるんですね。

例えば、五百年とか千年前に、自分が前の世で修行した経験から推して、その時の魂が現在の自分に対して教える。それは自分以外の靈魂が教えるくるような感じ方なんです、事実は同じ靈魂なんです。

また同じ靈が、現在人間として生まれ変わつてきておつても、その靈魂は前の世の時の姿のまま靈界に残つておるんです。物質の場合は、変われば前の物は消滅するんですが、靈魂というのは、どうもそんなもんじゃないらしい。

言い換えると、前の世の加藤清正が、現在の誰かに生まれ変わつておるとすれば、もう靈界には加藤清正という人はいないのかというと、三百年、四百年前の人間が靈界には居るんです。そしてその靈が、現在の人間にもまた生まれ変わつてきてゐる。

心靈科学の人は、それを背後靈と言うのかもしれませんが、私から見れば同じ靈魂なんです。人によつては現在の顔をじつと見ておれば、前の世の時の顔が、その人の肉体の上に二重にすつと出てくる場合もあるんですね。別個のような形であつて、一つのものであるというのが、靈魂の面白いところなんです。

人間的向上と靈波長の浄化

靈動から入つても、いかなる道から入つてきても、私が一番結構だと思ふのは靈感というものなんです。中には、自分の潜在意識や感情が靈感のような姿で出てきたり、ややこしいことになる場合もあるので、注意は必要です。しかし順序をお

うて人間的に自分の靈能の修行をして、結果として出てくる靈感は正しいものなんです。

放射的に出ておる自分の靈波長というものが非常に敏感になり、正常なものになつておりますから、その靈感できつちりと物事が解つてくる。また自分にもきつちり教えてくるようになるのが、私はもう最終的なものだろうと思ふ。

ものが聞こえたり、見えたり、五感で身体に感じる方が楽なんです、そうしたものは、かえつて不確実な場合が多いんです。そんなものをずっと超越してきて、ものが自分の心で観える、心で聴くというように、最後は靈感一本になつた場合が一番的確で正しいんですね。ここまでになる人間的修行というものは難しいんです。

皆さん方も靈感とか、靈能、靈視、靈聴ということには、あまりこだわらん方がいいと思ひます。それよりも、自分自身を、自己の靈というものを磨き上げ向上させていく。靈波長というものが美しく敏感になるように修行していくということが一番いいんです。

自分の家庭の中や自分達の親族の中に一人澄みきつた靈波長を持つておる人がおれば、因縁因果で、血のつながつた縁とか、それ以外の色々な縁によつて人間はお互いに結ばれておるんですから、周囲の者がそれだけ自然に浄化されていく。何も手をくだしたり、話をして浄化さすんではなくて、自分の身体から出ていく靈波長によつて、縁のある者がそれだけ浄化されていく。いわゆる向上していくということになるんですね。

昔の坊さんは、一人まじめな出家者がおると、自分の父母から始まつて、六親等の人が救われると説いてゐるんです。それで自分の家の罪滅ぼしの為に出家した人もたくさんあるんですね。

昔の人の言われた出家というのは、自分が本當

に綺麗な靈波長を出せるような人間になるということ、仏像や仏教の教えによって出家するという形だけのものではないんです。それは仏さんの道であろうと、神さんの道であろうと、誰の道でも同じことなんです。

皆さん方も、そんなことをよく研究され、また悟りもして、心霊現象のような形にとらわれないで、それを超越し、人間の靈魂を向上、浄化していくということに重点を置くのが一番必要だと思うのです。

宗教の大道目的

こういった方法で注意して精神修養や精神統一をやっておられると、その人に応じた修行方法が出てきて教えるんです。

口に出て来る場合でも、自分が喋ろうと思わないのに口に出てくるんです。外国語で出てくるのは知りませんが、一度口を滑らすと止まるところがない。これを聞いておつても始めと終わりがどこだか分からんような、ただ言葉を並べるだけであつて、それには何一つ意味がないというような状態になる期間があるんです。それはまあ喋ることも止めることも自分で自由にできる場合もあります。しかし、本当に内からくる言葉が、止めようと思つても止まらないで、一時間でも二時間でも喋るような者もあるんですが、それにもまた意味がないんです。

これは動かraいく静なんです。口が動いて言葉が出てくるというのは動なんです。その動の中の精神内容が静かになつていく、動から静にいく一つの修行の方法として、意味もなし、ただ言葉ばかりを連ねるといふ行の仕方をする人もあるんですね。

最初が一番難しいんですよ。現象として出てくる場合は、天狗にならさないようにうまく指導しなければいけない。周囲の者もなまじ靈能が発揮したんだというような認識で、相手を見ることは間違つておると思えますから、慎まなければいけない。

人によつて皆出方が違うのも前の世からの原因もあり、その人が持つて来たものですから、皆だいたい同じ程度なんです。それを超越して最後には美しい靈感ですね、何も聞こえない、動作にも出て来ない。自分の靈感だけが、びしっびしっと感じてくる。これが何と言つても最高のものなんです。

皆さん方もそうなつてこられたら、大倭の味、信仰の味というものが、人間向上という宗教における最後の仕上げの道が開けると思ふんですね。そのつもりで修行してほしいと思ひます。

宗教はどこまでも、自分も幸福になりたい、幸福にしなければいけない。家族の者も幸せにならなければいけない。社会全体も平和にしていかなければいけない。自他共にお互い助け合つて平和な現世楽土というものをこの地上に建設するということが大道目的であるんですから、大倭の皆さんもそういうような気持ちで、どうか信仰を続けて欲しいことを願ひます。(文責 編集部)

ウクライナ・キエフ市 竹内 高明

『とおやまと』で愛生園の記事がありました。岡山にいる私の父は、趣味で短歌をやつていた關係で何度か愛生園に行つたことがあるようです。神谷美恵子の本も彼の書棚にあります。父は和氣郡出身なので、閑谷学校がまだ旧制中学として使

法主帰幽祭 ご案内

日時 平成二十年二月九日(土曜日)

●午後一時半より法主様奥津城においてお参りをいたします。

●午後一時より大本宮拝殿において帰幽祭をとり行ひます。

現身はよしくつるとも永久に

結ぶ心のかわるものは

法主様のご帰幽されたその日から、このお言葉の重みをずしりと感じはじめた方はたくさんおられる事でしょう。それは既に心の原

点に、
顕幽不二 還元帰一

の八文字があるからでは……。

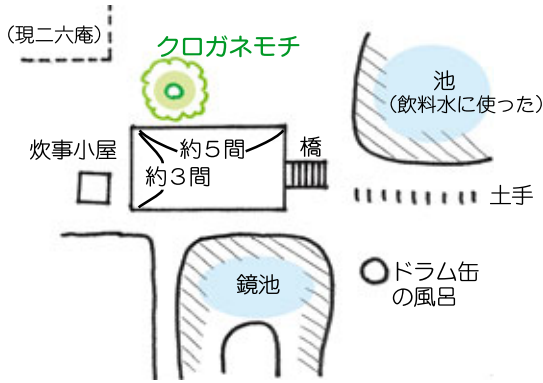
宗教法人 大倭教

わけていた時代、通つていたということ。そういう(うつすら)縁のあるところについて

の記事が『とおやまと』に載つてゐるのを、キエフで読むというのも面白いことで、ありがたく読ませていただいています。キエフは雪が積もつて零下の気温ですが、奈良ももう寒くなつてゐることを思います。(07 12 17)

大倭あちらこちら (第22回)
 大倭の樹木たち (2)
 法主遷座 クロガネモチ
 の記念

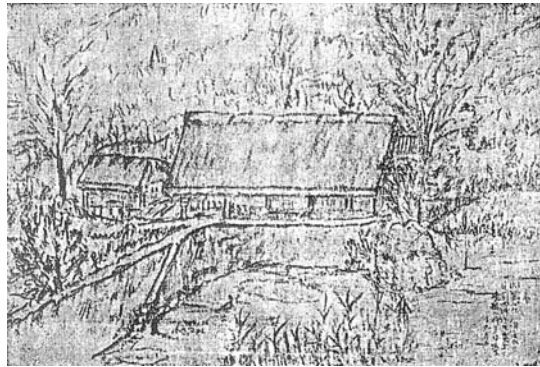
今回の「大倭の樹木たち」では、現在杉本順一さん一家が住んでいる「二六庵」の西斜め下に生えているクロガネモチを紹介します。樹高約八メートル、根元から一メートルの幹の太さが約八十二センチのモチノキ科のこの木は、しめ縄が巻かれているので、すぐに見分けがつくと思います。この木がここに植えられたのは昭和四十年代半ばのことで、法主様がこの地にはじめて遷り住まれた記念樹として、近くの穴虫（現在の藤ノ木台二丁目あたりの旧地名）から移植されたものです。法主様は「大倭の軌跡」という文章の中で、



「昭和二十二年十月三十日、妻と四人の子供、それに同居者等併せて十数人、私宅を捨てて須加宮に移り、掘立茅葺小屋での最低生活を始めた」と書かれています。このクロガネモチ

さらしの一階部分は食堂として使っていたそうです。それ以前に日元さんは、河内柏原の物置小屋を解体して来た材木で拠点となる小屋を建て暮し始めていました（後に炊事小屋となる）。すぐ近くの池の水を飲料水とし、風呂はドラム缶を使っていたとのこと。五十嵐さんは当時をふりかえって、「大人は大変だったろうけれど、子供心には楽しかった」と語ってくれました。

ところが、二年足らず後の昭和二十四年八月二十九日の早朝、この建物は突然の火災に見舞われたのです。法主様は「あしあとをきぎむ」という文章の中で、「家の子全員の住居は、全焼したのである。一粒の米すらもない。名実とも裸でほろびだされた。悲惨というものを通り越して笑いが



炎上せる大本宮仮住家（日聖畫）
 昭和24年9月4日発行『大倭』第9号より

が、この地に生えていた松の木や大倭神宮の竹などを材料にして建てたもので、屋根裏の二階部分で皆が雑魚寝をし、吹き

このクロガネモチが生えていた穴虫では、法主様の門弟であった桑村日祐さん一家が住んでいて、畑の耕作にも従事していました。桑村さんの帰幽後、宅地開発が進んで、「法主様はこの地の記念のためという思いもあって、この木を移植したと思う」と中島健さんは語ってくれました。この木には、草創期の大倭をめぐるさまざまな想いがこもっているようです。

ところで、クロガネモチやモチノキの樹皮からは、かつて小鳥を捕るのによく使われていた粘着性のゴム状物質である鳥もちが採れるので「モチ」という名が使われているそうです。このクロガネモチには小さな赤い果実が密になりますが、すぐに鳥に食べられてしまうとのこと。

法主様がこの地に遷座されてから六十年が過ぎましたが、この木を眺めながら大倭紫陽花邑の誕生に思いをはせていたのだと思います。



できてきた。焼けるものは惜しげなく灰にして、かさずこれにかわる次の建設に総動員したのである。炎々と夜明けの空を紅に染め、勢いよく舞い上がる飛龍にふさわしい焰を眺めながら、庵（瑞光庵）の仕事に取りかかった。……」とこの時の状況を記しています。

（岸田哲記、齋藤正宏写真）

第19回 大倭会文化講演会報告

ひとつつらなりの生命(いのち)

原子力発電を考える

平成19年11月11日
講師 菊地洋一さん

①講演の最初に相馬敬子さんの、医師・鎌田實さんの言葉と憲法9条の朗読がありました。



②「現時点で、特に気になるのは東海地震による浜岡原発震災です。私は技術者としてGE原発の建設に従事して、それが沸騰水型原発で巨大震災時には巨大事故を起こす可能性が高いことを、電力会社や国の役人よりも具体的に詳しく知っているからです。もちろん、対策は十分考えているが、設備が老朽化してくれば想定どおりにはいかない」というようなことでも、菊地さんは少しも声高な告発調ではなく、静かに語られました。

(報告者) 奈良県橿原市 伊藤 克夫

「菊地洋一さんの講演会の報告文を書いてくれないか」という、僕にとって少し荷の重い依頼を受けて、当日、かすかに不安な気持ちで学園前からバスに乗ったせい、バスは途中から道をそれ(どうやら間違えて別のバスに乗りましてしまっ

たようです)、慌てて気づき、途中でバスを止めてもらい、歩いて大倭紫陽花邑に到着したころには、すっかり体も温まっていました。
今から書く文章は報告というよりも僕というフィルターを通して菊地さんの話がどういふふうに関こえたかというものになりそうです。

最初に僕自身が講演会のお話をどのように受けとめたかを書かせていた。前に、懇親会の席上でみなさんが発言された意見(残念ながららすべての方の意見を記憶出来ませんでした。すみません)を順不同で紹介させていただきます。

林修三さんは「プルトニウムの保管場所が日本では青森、中国ではチベット、ネイティブインディアンでもそれは同じ。聖地とよばれる辺境の地に限って廃棄物焼却施設が立地している。構造的にそういう負のものを背負わされる流れがあるのだろうか」。

杉本順一さんは「菊地さんの運動がいかに孤独なものかを強く感じました。法主さんは孤独が分かっていたらいたしたもんやと言われました。講演中の天気が晴、大雨、雹、また晴と目まぐるしく変化した中に龍神の動きを感じました」。僕は、それは食品メーカーでは内部告発の形で出てきてるし、原子力発電の世界でも今後、何かの動きが出てくるということなのかと思いました。

高橋良美さんは「人間のやることに事故はつきものという考えを常に持っている。想定外の地震も含めて考えると不安」。

見田暎子さんは「中国の原発の推進のスピード

が今後上がっていくことは確実、日本の土建会社が低い規制のもとで進出して、本当に恐ろしい」という意見をあげられました。

僕はその場で清水哲男さんという詩人の「短い鉄の橋を渡って」という詩の一節、「光を集める生活は、それだけ闇を深くしていくだろう。」というフレーズを紹介させていただいた。

齋藤正宏さんはご自身の旅の中で遭遇した、札束で貧しい村の漁師が寝返る状況のなかで破壊されていく人間関係のことを悲痛に紹介された。

最後に井手泉さんが、明治以降、特に戦後、顕著に押し進められた開発、発展、豊かな暮らしを追い求める生活を列車に喩えて、「間違った軌道に乗った結果の今の日本、そして精神的に本当はどンドン、貧しくなっているのでは」と話された。

齋藤さんが発した、心の底からの声で僕が感じたのは江戸時代に天草半島で、隠れキリシタンたちの弾圧の際に考え出された踏み絵のことです。自分を最後まで曲げずに、踏み絵を踏めなかったキリシタンの人たちが、開発の村で最後まで抵抗運動をする菊地さんや、齋藤さんが出会った漁師の姿と重ね合わされます。それは僕が住む町で進められる京奈和高速道でも、形は違えども発生しています。

僕が菊地さんのお話を聞いて、思いを馳せたのはもう20年以上も昔、『わら一本の革命』(春秋社1983)の著者であり、現代の老子とも称される福岡正信さんを愛媛県の山村にある、「小心庵」に訪ねたことです。この本は農業に関わりのある方だけではなく、近代科学の行く末や原子力問題に関心がある方など、様々な方に一読してみたい本です。実は僕も、この講演会の聴講記を記すのに、はて?どうしたものかと思ひ、再読して

いるところですよ。

せつかくの菊地さんの報告文章で福岡さんの書かれた詩を紹介するのも失礼かもしれませんが、響きあうものを感じ取れると確信しますので、あえて長くなりますが引用して、読者の方々に感じたり、考えたりしていただければと思います。

風心

人類文明の遠心的な発達は 極限に達した
このまま膨張し崩壊してゆくか

反転して求心的に収縮するか

滅亡か 復活か 岐路に立つ人間

足下の大地は崩れ始め 天も暗くなった

これだよいのか

人々は苦慮して 泣き笑い

何をしてもよいかかわらないまま右往左往する

それでもなお

ただ一途に人間の智慧を信じ

何かを為すことによつて

矛盾を解決できるだろうと期待する

馬鹿な動物は 馬鹿なことを知らないから馬鹿

をしない

利口な人間は 馬鹿馬鹿しいと知りながら馬鹿

をする

終末の近いのを知つて

未来の夢をみる

地球の汚染を嘆くもの

人間の智慧を誇示するもの

みんな人間を 愛しているのだが

誰が 自然を守護し

誰が人間を 混乱に陥れているのかかわらない

……

問題は

人が 善いか 悪いかを考え

自然は 善だ いや悪だと争い始めた時から出

発した

自然は 善でも 悪でもない

自然は 弱肉強食の世界でも 共在共栄マ

の世界でもないのに

勝手に決めつけたのが間違いの根だった

人間は 何もなくても 楽しかったのに

何かすれば 喜びが増すように思った

物に価値があるのではないのに

物を必要とする条件をつくつておいて

すべては 自然を離れた人間の智慧の一人角力

だ

無智 無価値 無為の自然に還る以外に

道はない

一切が空しいことを知れば 一切が蘇る

(福岡正信 昭和50年)

菊地さん自身、32歳まで建築コンサルタント、その後、オイルショックの時代を経て、米国G E社の原発技術者として身を持って原子力の「闇の世界」を知ったといえます。

1980年代以降、6年間は中近東のアブダビを中心に石油関連施設の責任者として従事されました。帰国3年後、東京を離れ、50ccバイクで全国を走り、草花や昆虫の写真を撮りながら、生命の愛おしさを見いだされてきました。この10年、鹿児島大学で地球環境エネルギー論を担当し、ポランテアで脱原発社会を提案し続けています。

現在、ライアル ワトソン著『生命潮流』の中の百番目のサルで有名な宮崎県の幸島の真向かいで暮らされているそうです。我々を絶望させないために「人間はカタストロフ(II破局)の起こ

る前に、原発をやめるのではないか」と話された菊地さん自身が、百匹のサルを確かに増やすことを呼びかけ続けていくのだろうと確信されます。

◆表紙写真によせて

何回も『おおやまと』紙の表紙を飾った菊地さんの写真をご記憶の方もいると思います。講演会場では菊地さんの写真展もありました。

今回の表紙はその中の一点、梅がつく名にひかれて珍珠梅ですが、中国華北原産で5月中旬、盛夏が花期。山裾のような所で撮影されたそうです。

参照 <http://sunnywyo.exblog.jp/>

(この項と前ページ写真説明、岸野春子記)

◆講演会を終えて

菊地 洋一

私の講演に先立ち、敬子さんが「日本国憲法前文と第9条」に関して朗読されましたが、もし、今、私に原発以外の話を……と言われたら、私も同じテーマで話をさせていただいたのではないかと思います。自民党や民主党の多くの議員が憲法を変えようとしているからです。

1946年の憲法制定に際し、この国が国民に大きな感動を与えた空前絶後のすばらしい言葉が『あたらしい憲法のはなし』の中にはあります。

政府が全国の学童に配布し、父兄にも読むように要請したのですが、自衛隊の発足で、その夢は脆くも3年で崩れました。

しかし、武力紛争や戦争をなくす道が完全になくなった訳ではありません。日本のみならず世界中で多くの人が平和を祈り、行動を起こしています。『百番目のサル』の著者ケン キース ジュニアは「その臨界点が何番であれ、この私たちの文明を救うには、あなたが必要なのです」と言っており、私も世界平和の実現、核施設の廃絶を目指して歩んで行きたいと思っています。

A W T C 日誌



12月13日 大倭会会員である東大阪市の吉田種一さん帰幽。秋の一泊文化行事で、奥さんの奠孔さんの歌にあわせ踊られた「てるてる坊主」は秀逸でした。

12月15日 大倭神宮月次祭。
この日、三重県津市のヤマギシ会から沖永和規 雅子夫妻、佐貝貞夫 のぶ夫妻、新島里子さん 宮路昌幸さん6名が来邑。教務本庁で岸田哲 杉本順一 山本栄二さんと歓談、菅原園を見学後、大倭神宮で見田暎子さんから話を聞かれました。

12月16日 午前9時半より邑人 大倭会の有志による大倭神宮大掃除。作業も終わり、全員警座の前で作業の無事を感謝しご挨拶をしました。お昼のお弁当を配り終えた頃、清めの雨が降り始めました。



12月22日 日聖祭のため邑内の注連縄 門松も整い、拝殿の大掃除、餅花 金屏風が飾られました。

12月23日 大倭元旦。日聖祭。午前10時より奥津城(写真上)で、10時30分より拝殿において祭典が行われました。
また午後1時より直会演芸会(写真下は「岸壁の母」を歌う菅野弘子さんと、母の台詞を言う松本モトさん。笑わせ、また泣かせる熱演でした)。

12月24日 高橋良美さんの母高橋アヤ子さん(89歳 福島県)が帰幽されました。

12月30日 午前9時より餅つき神事。今年もF I W Cの皆さんが多数参加してくれ、楽しくにぎやかに行われました。

12月31日 夜11時から邪気祓い神事として、邑の若者を中心に拝殿の大太鼓を365回打ち鳴らし、この1年の清め祓いが行

われました。

1月1日 午後1時から法主さんの奥津城でご挨拶の後、邑の各守護霊に挨拶。午後2時から大倭神宮において年始祭が行われました。

1月4日 高橋良美さんの父高橋義雄さん(93歳 福島県)が帰幽されました。

1月6日 大倭神宮月次祭。
午後6時より大倭会館で邑人関係者の新年夕食会が開かれました。

1月7日 午後2時より拝殿において大倭安宿苑の幹部職員、大倭印刷棟、大倭殖産棟、大倭大宮の関係者による年始会が開かれました。今年も青山日元さんの伊勢音頭を聞かせてもらいました。

1月8日 前日、横須賀の弟さん宅から元気に戻った昇ちゃんこと中村昇次さんは、朝から1日中、邑内に居る気配がない。お年玉を懐に街へ繰り出したか？

大倭安宿苑では
1月4日 新年祝賀会を開催。
今年、成立50周年記念事業であるケアハウス茂毛路園が開設計画。職員一同にとり更なる飛躍の年となりますように！
(菅原園)

12月22日 年忘れ会。ご家族も一緒にゲームやケーキ作りで盛り上げました。

1月6日 大倭神宮に初詣。

(須加宮寮)
12月5日 奈良県心身障害者作品展の見学に。

12月19日 行事食で忘年会。ゲームや歌で、楽しい時間を過ごしました。

(長曾根寮)
12月24日 クリスマス。各フロアにツリーやサンタクロースで雰囲気作りしました。
たこ焼きのおやつ作り(デイスービス)。

【俳句の風物】 上田森彦(97歳)
ささ鳴きを覗く子と待つ雑煮かな
笹鳴きは、初冬、鶯がまだ鳴き慣れずに舌鼓を打つ様に鳴く声のこと。水巴は1882〜1946年、高浜虚子らに学ぶ。
三ヶ日うちの雀とつちに居る 森彦

(八重垣園)
12月12日 11名の方が、さえぐさなおこナツメロシヨニーに参加。

12月23日 直会演芸会にコーラスクラブ 詩吟クラブ出演。
俳句投稿箱より 「年毎に書く賀状減り親友も逝く」「大晦日果つれば響く宮太鼓」「年始め孫子と囲む米寿かな」

編集後記

▼法主様の言葉を中心に、ご縁につながる皆さんの交流が深まるような紙面を作っていければと念願します。現実の紫陽花邑

A T M i C

* 玉緒祭(大本宮)
2月3日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じ謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

* 月次祭(大倭神宮)
2月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

* 法主帰幽祭
2月9日(土) 午後1時半より奥津城と拝殿にて。4頁参照。

* 大倭会主催第四七〇回祝会
2月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)
2月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

* 申孝祭と月次祭(大本宮)
2月23日(土) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭について詳しくは、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと」や『おおやまと』の平成19年12月号等をお読み下さい。

は小さな場所ですが、それぞれが、それぞれの場に根を下ろして、そして仲良くというネットワークが大倭というものかなと私はイメージしています。(春)